

60周年を迎えた日本地球化学会の 過去・現在そして未来

日本地球化学会会長 吉田 尚弘

日本地球化学会は本年、その前身である地球化学研究会が1953年4月に会員約200名で発足して以来60周年、1963年4月に学会となって以降50周年を迎えている。また、本号が刊行される今秋の2013年年会は第60回大会として、つくばで、日本鉱物科学会と合同開催される。この節目の年にあたり、60周年の慶びを会員の皆様と共有するとともに、60周年記念号を企画された「地球化学」編集委員会の企画力と、それにお応えいただき、素晴らしい内容の原稿をお寄せいただいた執筆者の方々に、まず、心よりお礼を申し上げたい。

編集委員会から本号の最終稿を読む機会を与えていただいた。地球化学誌は10年前にすでに本会として50周年特別記念号（地球化学第37巻1号，2003）を出版している。また、25年前に松尾禎士著、日本地球化学会の25年回顧と展望（その1）（地球化学22, 123-137, 1988）という論説も出ていて、合わせて、通読する機会を持った。

これらの中で、地球化学の過去を記載された論説は、いずれの文章も秀逸で、過去60年を超えて90年前の日本導入時からの「地球化学」の歩みが、史実に基づき丁寧に、あるいは原体験に基づき生々しく描かれている（本号では【地球化学・温故知新】の野津憲治、長澤宏、和田英太郎、海老原充、杉崎隆一の各師）。恩師である松尾先生からは様々なことを教えていただいたが、私が修士課程の学生当時、新たな観測に挑戦してなかなか結果が出なかった時に、「或る「小倉日記」伝」（松本清張，1952）を読んでみてはどうかね」と言われたことを思い出した。失われている大事なものがあることを“発見”し、苦悩の中でもひたすら探し続ける姿勢は、地球化学者の飽くなき好奇心と探求心と重なって、背中を押された記憶が、これらの論説を読む中で蘇った。時代は変わっても本質的に学問的な好奇心と探求心は変わらない、あるいは変わらないで欲しいと願う今がある。

本号ではこれらのように60年を振り返ることに加えて、編集委員の方に有為の若手研究者の方が多いこともあり、大変ユニークな企画がなされ実現した。将来の夢を語るシリーズ【30年後の地球化学】の丸山茂徳、鳥海光弘、加藤學、荒井章司の各師と【2043年の「地球化学」想定論文集】の田中剛・加藤丈典、蒲生俊敬、植松光夫の各師の論説がそれである。これらのどの論説も、それぞれのご専門に近いところやその発展的な分野での具体的な展開と期待が、論理的に整然と、またある論説では近未来SFの「予想論文」として述べられている。これらが「予想」でなく、実際に、後ほど述べるように、オープンアクセス誌となり、「気にしなくてよい指標」となったインパクトファクターが10を超えて、地球化学のリーディングジャーナルとなった *Geochemical Journal* にそれらの初報が報ぜられ、同様に進化した地球化学誌にそのレビューが載せられている」ことを期待したい。

高橋編集委員長からは、本書の緒言として、過去60年と将来30年をつなぐ、「現在」について記載することを依頼されたので、本稿の趣旨に戻りたい。歴史において現代史は記載が難しく、また、その評価はいずれ将来を待たねばならないのは、現在の本会の活動も同様である。この大きな変革期に取った方針と行動が的確であって、その結果、本会が方向を過たず、会員の協力を得て、正常に発展していくことを期待したい。

“現代史”は、もうそれだけ経ったと思えない2年半前から始めることにする。2011年3月11日、東日本大震災が起こったのち、本会は速やかに科学的な取り組みが必要であることを発信し、多くの会員のご協力を得て、国内外の研究者を結集するために中心的な活動を行ってきた。その結果、放射性核種の拡散

については、科学技術戦略推進費「福島第一原子力発電所事故に伴う放射性物質の長期的影響把握手法の確立」による研究 (<http://ramap.jaea.go.jp/map/>) が2011年6月より開始され、また、2012年度より科学研究費補助金（新学術領域研究：研究領域提案型）「福島原発事故により放出された放射性核種の環境動態に関する学際的研究」 (<http://isetr.suiri.tsukuba.ac.jp/>) などが推進されている。また、同年、Geochemical Journal の特集号として Fukushima Review (www.terrapub.co.jp/journals/GJ/FukushimaReview.html) がオープンアクセス化され、出版された。これらを含めた多くの研究を、多数の本会会員が継続、深化している。しかし、未だに現在進行形であるこの事故に対して本会として、できたことと、できていないことがあり、やるべきこともまだ相当にある。今後は地域から地球規模で、大気・海洋・陸域の表層環境観測を発展継続するとともに、地球内部研究の深化、再生可能エネルギーと新たな資源探索など、持続可能社会構築に向けた環境エネルギー研究を通じた社会貢献に、本会が大きな寄与をすることを期待したい。

草創期に初期の地球化学の基礎を築いた V. M. Goldschmidt 博士を冠して、地球化学の世界的科学集会として1988年に開催されるようになった Goldschmidt Conference（以下 GC）の第13回が2003年、本会50周年の際に倉敷で開催されたことは多くの会員が記憶されていることと思う。数年前から日本で近い将来に開催することが、いつか多くの本会会員の希望となっていた。奇しくも本会60周年を間近に控えた2012年にモンリオールで開催された GC 2012の冒頭で、2016年に第26回の日本開催が決定し、その後、横浜で開催されることが2012年末に正式に決定された。2012年冒頭から現在まで紆余曲折があったが、結果的に、会員の総意として2016年に日本で GC 2016が開催されることは喜ばしい。科学的にも運営的にも成功させることは歴史的な必然でもあるので、是非、会員の皆様のご協力をお願いしたい。また、本会以外の国内外の学会にも協力をお願いすることになる。加えて、継続的な年会であることを思い出して、各年の GC に対する科学的貢献とともに、2016年開催ののち、また近い将来に GC 日本開催が実現することを期待したい。現在、GC 2016開催決定を機に、European Association of Geochemistry および Geochemical Society と本会との間で全般的な MOU 締結に向けた活動を進めている。

GCに代表されるような欧米との交流に加えて、これまで10年近く懸案であった MOU を、2012年に中国鉱物岩石地球化学会との間で調印・締結したことはウェブや総会でご報告申し上げた通りである。これまでも会員間での交流はあったものの、個人レベルで、ある程度限定的であった。この全般的な MOU の下で、両学会および会員間で将来に向けた協力関係が広がり、促進され、強力で推進されていくことを期待したい。

本年2013年年会はずくばで日本鉱物科学会と合同開催で開催される。このような他学会との連携は大変大事であるし、今後もこのような開催が増えていくことを期待したい。また、この機会に MOU を締結した中国鉱物岩石地球化学会 Liu 前会長（東工大 GCOE で招聘）および Hu 新会長（本会が初めての国外研究者として招聘）を招聘している。今後は本会と中国の学会との交流が益々盛んになることを、また、中国以外のアジア太平洋地域、欧米を含む諸外国の学会との交流が盛んになることを期待する。

1966年発刊で、47周年を迎える本会発行の国際誌である Geochemical Journal 誌が2013年度から5年間、科研費（研究成果公開促進費）「日本地球化学会発行国際科学誌による国際情報発信強化の取組」に採択され、前述したようにオープンアクセス化に向けて大きく推進される。翌1967年発刊で46周年を迎える地球化学誌もこれまでの編集委員会と会員の努力により隆盛であり、和文誌としての特色を生かした雑誌が、出版形態も変革されていくと予想される。学術論文の出版形態が現在、大きく変わりつつあり、オープンアクセス化が大きな流れとなり、あるいはレビューも公開される雑誌がすでに実績を伸ばしている状況にある。今後、特に数年から5年、さらに出版形態が大きく変わることが予想される。この変革に少なくとも同調し、できればリードしていけることを期待したい。このように出版形態も重要であるが、どちらの雑誌も、科学誌として、もっとも重要なのは科学的内容であるので、会員の皆様の積極的な投稿、査読、広報を両編集委員会とともにお願いしたい。

前期評議員会および今期評議員会と、法人化を WG で検討してきた。現時点では時期尚早ということ

で、すぐに法人化はしないと評議員会で決めてきている。しかし、いずれ近い将来に法人化することが予想されるので、準備を進めるとしている。連合や他学会との連携も推進しつつ、発展した本会の法人化に向けた準備を来年度以降には時期を見て、ある段階で加速していくこととなると思われる。

2010年、内閣府総合科学技術会議での大型研究計画公募以来、本会会員が関わり、いくつか提案がなされて来た。2012年より、これまで通り、いくつかの重要な提案に本会会員が関わる一方で、本会全体を統一的に包含すべく、より広範な一つのテーマとして「サステナブル地球科学を先導する地球化学分析拠点の形成」を本会として取りまとめ、2013年3月に日本学術会議に対して、大型研究計画マスタープランとして応募し、4月にヒアリングに参加した。今後も本会の発展方向に沿った研究計画を、十分に練って、然るべき時に、然るべきところへ提案し、実現していくことが肝要である。

もちろん、成し得ていないことは枚挙にいとまがないが、少子高齢化、困難な政治経済状況において、諸学会を取り巻く環境が大変厳しい中、数年前からの日本地球化学会の現在は、外見的には比較的順調であると言える。これは本号の論説に多く書かれている通り、これまで過去60年間の諸先輩の先見性のある基礎作りの上に、現会員の皆様のご努力が付加されてきた結果であると考えられる。日本地球化学会が地球化学という科学を大いに推し進め、また、その運営に当たっては多くの会員の献身的な努力がなされていることを理解して、互いが尊敬し合える学会として発展していくことを期待する。

引用文献

- 荒井章司 (2013) サイエンスとしてのマントル掘削：そのインパクトと展望. 地球化学, **47**, 167-170.
- 海老原充 (2013) 地球化学会60周年に寄せて：シカゴ大学での2年半. 地球化学, **47**, 139-147.
- ISSET-R (2013.8.2) 福島原発事故により放出された放射性核種の環境動態に関する学際的研究.
<http://isetr.suiri.tsukuba.ac.jp/>
- 加藤學 (2013) 火星からのサンプルリターン. 地球化学, **47**, 163-166.
- 丸山茂徳 (2013) 宇宙と生命の起源解明と未来の理解に向けて. 地球化学, **47**, 155-157.
- 松本清張 (1952) 或る「小倉日記」伝. 三田文學, 1952年9月号.
- 松尾禎士 (1988) 日本地球化学会の25年回顧と展望 (その1). 地球化学, **22**, 123-137.
- 文部科学省 (2013.8.2) 福島第一原子力発電所事故に伴う放射性物質の長期的影響把握手法の確立. <http://ramap.jaea.go.jp/map/>
- 長澤宏 (2013) 地球化学の戦後——つわものどもが夢の跡. 地球化学, **47**, 117-127.
- 日本地球化学会 (2003) 50周年記念特別号. 地球化学, **37**, 1-70.
- 日本地球化学会 (2013) Special Issue: Fukushima Review. *Geochemical Journal*, 46-47.
<http://www.terrapub.co.jp/journals/GJ/FukushimaReview.html> (2013.8.2)
- 野津憲治 (2013) Geochemistry は「地球化学」か「地化学」か：Geochemistry が日本に導入された1920年代の葛藤. 地球化学, **47**, 105-115.
- 杉崎隆一 (2013) 私論「地球化学の広域的視野を探る、とくにその社会的機能」. 地球化学, **47**, 149-154.
- 田中剛・加藤典典・蒲生俊敬・植松光夫・地球化学編集委員会 (2013) 2043年の「地球化学」想定論文集. 地球化学, **47**, 171-179.
- 鳥海光弘 (2013) 地球化学におけるデータ駆動科学. 地球化学, **47**, 159-162.
- 和田英太郎 (2013) 窒素・炭素同位体生物地球化学から同位体生態学への半世紀. 地球化学, **47**, 129-138.